

幼児期から児童期にかけての多面的自己の発達 (2)

— “関係の中における自己” の理解 —

○遠藤 利彦・保崎 路子・無藤 隆
(聖心女子大学) (お茶の水女子大学)

【問題と目的】 従来、子どもの自己理解は、周辺の要素(身体的・行動的側面等)重視の表面的理解から中心的要素(心理的・人格的側面等)重視のより深化した理解へと、漸次的に移行するものであると把握されてきた。あるいは、いくつかの際立った外在的特徴にとらわれた少数次元的理解から、内在的特徴も含め複数の視点を可變的にとり得る多次元的(多面的)理解へと、徐々に発達変化するものと信じられてきた(e.g. Broughton, 1978; Livesley & Bromley, 1973)。しかし近年、こうした発達過程が、子どもの実相にそぐわない、多分的な外れなものである可能性が指摘され始めている。例えば、Damon & Hart (1988)は、精細な個別面接を通して、就学前の幼児が既に、身体、行動的側面のみならず社会、心理的側面からも自己を描出し得ることを明らかにしている。そして、彼らは、子どもの自己理解が発達のかなり早期から本質的に多面的な性質を有していること、発達の移行は内容領域間(例えば身体的領域から心理的領域へ)で生じるというよりも、むしろ内容領域内で水準の向上という形で生じるのだと仮定するに至っている。が、ここで注意すべきことは、彼らの強調する自己の多面性とは、あくまでも内容(content)面(すなわち身体、行動、社会、心理といった言及する内容領域)での多面性であるということである。これは最近“関係性スキーマ”(Baldwin, 1992)あるいは“他者とともにある自己の表象”(Ogilvie & Ashmore, 1991)といった形で、多大な関心を集めつつある関係・文脈(context)に応じた自己の多面性とは意味合いを異にする。本研究の企図するところは、多面的自己の発達という問題を、従来のように内容面からではなく、関係・文脈という観点から検討することである。子はいついつ頃から関係や文脈に応じて可變的に異なる自己を発動させ得るのだろうか。あるいは、関係特異的な自己は、どのような過程を経て、やがて統合的・不変的な自己へと取り込まれていくのだろうか。本研究は、就学前、児童期前期、中期の子を対象に個別面接を行い、こうした問い(および問い自体の妥当性)に対する何らかの答を模索したいと考える。

【方法】 *被験児：保育園年長児32名(平均月齢5歳11か月)、小学校2年生37名(8歳6か月)、4年生

35名(10歳6か月)。*手続き：面接者が子と個別に対面し、子に1)母親、2)保育園・学校の保育・教師(先生)、3)好きな朋友、4)嫌いな朋友と一緒にいる時、どんな子であるか、どんなことをするか、どんな気持ちであるかなどについて質問を行い、自由に回答を求めた。*分析：自己描出内容を、身体、行動、関係、心理といった内容領域面からカテゴリー化した(詳細は前頁(1))他、その抽象度および肯定的内容か否か等について分析を行った。

【結果と考察】 ①まず一般的に子がどのような観点(カテゴリ)から自己描出し得るかという点について発達の傾向を見たところ、(1)の“他者から見た自己”とほぼ同様の結果となった。すなわち、顕著な特徴として2年生においては社会・関係のカテゴリ(対人的行動)に対する言及が、また4年生においては行動カテゴリ(能力を含む)に対する言及が相対的に多かったのである。この背景には、児童期以降の対人関係の深まりおよびその中での(他者と比較した上での)自己の行動・能力への評価的意識の集中などの要因の介在が想定される。なお、保育園児においては「わからない」と答えた子の割合が、(1)の“他者から見た自己”の場合以上に多く“関係の中における自己”の表象が低年齢児においては相対的に困難であることが窺えた。②次に関係に応じて子が異なる自己描出をなし得るかどうかについて分析を行ったところ、言及する(内容領域の)カテゴリという観点から見た場合には、いずれの年齢においても、関係に応じて言及するカテゴリ(の割合)に差異が見られるということとはなかった。しかし、より精細に言及内容を分析したところ、保育園児はどのような関係についても「いい子」という形で自己描出する傾向が強かったのに対し、2年生は関係に応じてある程度可變的に描出内容を変え得ることが明らかになった(例えば一緒にいる対象が先生の時は「いい子」で母親の時は「悪い子」と叙述する等)。さらに4年生になると関係特異的に自己描出する一方で“いつも変わらない自己”(不変的自己)を強調する傾向が顕著に認められた。子の“関係の中における自己”の理解は画一的・一面的理解から可變的・関係特異的理解を経て、さらに関係に左右されない不変的理解へと進行していくことが推察される。